
《500文字小説》夏の影

十司 紗奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《500文字小説》夏の影

【Nコード】

N6373U

【作者名】

十司 紗奈

【あらすじ】

幼い頃に住んでいた町を久々に訪れた僕が、知らないうちにおかしていた自分の罪を知る物語。

小学二年生まで暮らしていた町は変わりがなかった。緑の水田、真つ青な空に入道雲の長閑な風景。でも僕は、この町が嫌いだった。小柄ですぐに泣く僕は、いじめの対象だったからだ。そんな僕をかばってくれたのは、頭の回転も行動もゆっくりした少年だった。けれど僕は、彼と同列に見られる事を不快に思っていた。

この町を離れる事になった時、僕はいじめっ子達に体育倉庫に閉じ込められた。助けも呼べず、ただ震えて小さくなっていた僕の肩を誰かが掴んだ。思わず突き飛ばし、相手はボールを入れる鉄棒のカゴに頭をぶつけてしまった。あの少年だった。慌てて謝った僕に、彼は笑って「無事でよかった」と家まで送ってくれた。

「……あら、もしかして」
聞き覚えのある声。あの少年の母親だった。彼は元気かと訊ねると、相手は口を嚙み、嘆息を漏らした。

「……あの子、亡くなったのよ」
「えっ？」
「あなたが転校した夜、突然頭が痛いつて訴えて。どこかで頭を強く打ったのが原因だろう、てお医者さんが言ってたわ」

僕は駅に向かう道を歩いていた。
軽蔑しながらも、僕は彼がかばってくれる事を望んではいなかっただろうか。

夕暮れ時の濃い影は、僕の歩く目の前に長く伸びていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6373u/>

《500文字小説》夏の影

2011年10月8日19時20分発行